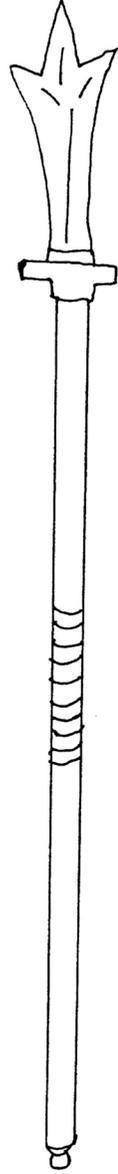
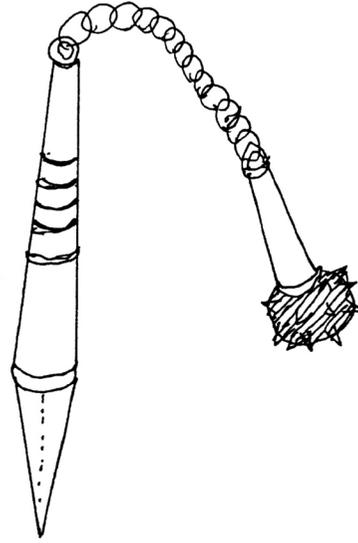


弯刀



三尖刀



短梢子

所々雲に隠されてはいたが、夜空には、ほぼ満天の星と言えるほどの星達が輝いていた。夕方から降り出した雨は一刻ほどで止み、その後には、昼の暑さを払拭するように冷涼な風が吹き抜けて行った。腹をくちくさせた面々は、思い思いに激戦の後の身体を休めていた。

「さすがは頭領だったな」

「そうよ、俺は絶対に頭領が勝つ。そう思ってたぜ」

「そうか。負けたらどうしようって、騒いでたのはおまえじゃなかったか」

「そんなことねえよ。俺は、最初っから信じてたって」

あちこちで、そんな他愛のない話し声が聞こえていた。

公孫勝、李逵をはじめ、主要な面々は雪華と黄玉の部屋に集まっていた。九天玄女、時遷の顔も見えた。

「公孫勝様。策が見事に成功されたそうですね」

雪華が言った。蠟燭の灯りが、ぼんやりと室内を照らしている。

「皆のおかげです。大変なはたらきだった。正直私も、ここまでの働きをしてくれるとは思わなかった」

公孫勝の言葉は、賛嘆ともとれるものだった。

「わたしも戦いたかった」

黄玉の声だった。いかにも悔しそうなその声音に、皆が笑い声をあげるほどだった。

「黄玉、まだ待つのだ。傷が治れば、おまえの出番は山のようにある」

李逵が慰めるように言った。

「じつと横になっていると、気がおかしくなりそうです」

そう言った黄玉を、公孫勝が厳しい目で睨んだ。

黄玉が、悪戯を見付けられた子供ののように、上掛けで顔を隠した。

「禁軍はどうなりました」

雪華が訊いた。

「二里は退いた。一の木戸の前の広場には、騎兵の斥候が数人屯して
いるだけだ」

「奴等、相当に気落ちしてると思うな」

陳統が自慢げに言った。その慢心を李逵が諫めた。

「戦いとは、そんなにあまいものではない。確かに、損害を与えはし
たが、騎兵にしても歩兵にしても、まだ儂らの数倍の兵がおるのだ」

「でも、奴等が戻る時に言ってたんだ。こんな戦に何の意味があるん
だって。俺達は好きで戦っているんじゃない。そうも言ってたよ。だ
から、俺は思うんだ。奴等の士気は高くない、出来れば戦いたくない
んだけだ」

李逵と公孫勝が顔を見合わせた。二人とも、同じことを考えていた。

「使えるかもしれぬ」

李逵が言い、公孫勝が肯いた。

緒戦に勝っておいてよかった。公孫勝は痛感していた。もしも緒戦
に大敗していたなら、それほど戦意の高くない禁軍兵士にも、勢いを
与えていたかもしれない。逆に、緒戦に大勝した今なら、さらに敵の
戦意を殺ぐことが可能だった。

「やってみる価値はある」

公孫勝が呟くように言うと、李逵が大きく肯いた。

「戦意の低い千は、戦意の高い百にも負けることがある」

李逵の言葉は、自分に言い聞かせるようでもあった。

「早速、明日から試してみよう」

公孫勝の言葉に李逵も賛同した。

「誰が」

「とりあえずは李逵殿が」

公孫勝の答えに、李逵は動揺した。

「馬鹿な。儂なんかでは、そんな大役は務まらん」

「ですが、他にはおりません。私は途中から入った者。顔も名も知ら
れていない」

「儂は……駄目だ。話すことは苦手だ。とても説得など出来ん」

「やってみなければ分かりません」

公孫勝は、もうその話は決まったことでもあるかのように言った。

雪華は、困り果てたように下を向いている李逵を、ただ黙って見詰めていた。

「公孫勝様、勝ち目は」

黄玉だった。

「ない」

皆、一瞬凍りついた表情になった。

「正しくは、勝つ戦いではない。そう考えてほしい」

「そりやそうだが」

陳達が、わけ知り顔で呟いた。

「いかに士気を落としても、この圧倒的な数の差は埋められない。それに、我々の目的は禁軍を破ることではない。逃げ延びることだ。このような状況で、動くことがままならぬから戦っているのだ。宋雪華殿が動けるようになるまで、持ちこたえることが出来たら勝ちなのだ。私は、総てその目標に向けて策を立てている」

公孫勝はそう言い切った。

「済みません。わたしが足手まといになってしまつて……」

雪華が、消え入るような声で謝った。

「宋雪華殿こそ、被害者だ。謝る必要はない。それに、我々全員好きで立て籠もり、戦っているのだ。宋雪華殿のことは、きっかけに過ぎない。我々は、我々の意志でこの国と戦う。そう決めているのです」公孫勝の言葉に、李逵は驚いた顔をした。こんなことを言う男だったろうか。自分の意志で、国と戦う。そう言っている。入雲竜と呼ばれるこの異能の男が立つのか。李逵は心が湧き立つのを感じた。この男が嬢さんのもとにいれば。李逵は心からそう願った。嬢さんに必要なのは、正しくこの入雲竜のような男だ。李逵は、初めて公孫勝に会った時からそう思っていた。雪華の惨状を知った時、真っ先に公孫勝を思い浮かべたのは、何も公孫勝が医師だからというだけではなかった。何か魅かれるものがあつた。自分にはない何か。それは、今の宋家党

に決定的に不足しているもの。戦いなら自分と黄玉がいる。情報通信なら聞起と陳統がいる。嬢さんを守るのなら曹瑛と石勇がいる。公孫勝は、その総ての上に戦略を持っている。もしも公孫勝が仲間になってくれたら、嬢さんにとってこの上もなく頼もしい相談相手になるとだろう。自分も齡をとってはいるが、とても嬢さんの悩みを解決してやれるほどの頭はない。自分に来ることは、こうして野蠻に戦うこと。そう考えて、李達は突然九天玄女の言葉を思い出した。天殺の星、正にその通りではないか。

「でも、わたしのせいで」

雪華の言葉を、公孫勝が遮った。

「皆、心を決めているのです。これ以上、自分を責めてはなりません」
公孫勝の声が、静かに雪華の心に染み渡った。

「そうだ、嬢さん。嬢さんに責任はない」

李達の言葉にも雪華は答えず、ただ項垂れているだけだった。

「雪華姉ちゃん。俺はこう思うんだ。俺達の仕事は、確かに村の建て直しには役立ったし、遼や西夏の人達にも喜ばれた。でも、この国の役や商人にとっては、目障りだったと思う。だから、いつか必ずこういうことは起きたと思う。それが、雪華姉ちゃんの身に起こったことは悔しいけど。阿骨打將軍も言っていた。俺達のことを邪魔する者が、必ず現れるって」

聞起だった。その目には、明らかな怒りの色が浮かんでいた。

「そうさ、この国は腐りきってる。もう、救いようのないほどさ。俺は西夏にいるからよく分かるんだ。宋に足を踏み入れた途端、風が澱んだように感じるんだ。確かに西夏に比べて、大きな城郭は豊かだよ。でも田舎に行ったら、西夏の方がよっぽどいい暮らしをしているよ」
陳統も不満で一杯のようだった。

そういえば、黄玉もそんなことを言ってたな。雪華は思い出した。

「この国でいい思いをしているのは、朝廷と役人、それと大商人と賊くらいのものさ」

石勇が、吐き捨てるように言った。普段、あまりそうしたことと言

わない石勇が言ったのを聞いて、陳統と晁蓋が驚いたように石勇を見た。

「何もそんな顔で見ることはないだろう。俺だって考えてるんだ。頭は悪いけど」

「いや、嬉しいだけさ。おまえが語ってくれたのが」

そう言っつて陳統が宥めた。石勇は、照れたように顔を赤らめた。

「皆、それぞれに不満を持ってたつてわけか」

晁蓋が話を引き取った。

「おまえはどうなんだよ」

陳統が挑むように訊いた。

「俺はな、親父の生き方を見ていて、あんな人生は送りたくないと思つてたんだ。親父は、それでもいい保正だと思ふ。役人と村人の間に立つて、親父がどれだけ苦労しているか、俺はよく知つている。役人は村人のことなんて考えもしない。死なない程度に生かしておく。死なれちゃ、自分達も困るからな。親父は、役人が不満を持たない程度に村人のために交渉する。だけどな、どんなに頼み込んでも、その効果なんてたかがしれてる。せいぜい、村人一人につき粟一袋程度のもんさ。そんな僅かなもののために、親父は身を削つて走り回る毎日さ。粟一袋だつてないよりはましさ。でもな、そんなものが男の一生とは思えねえ。粟一袋なんて言わずに、まるまる国一つを皆に返してやりやあいいじゃないか。それこそ漢の生き方だつて、俺は思うんだ」

陳統が感心したような顔をしていた。

「晁蓋、おまえも考えてるんだな」

「ただの馬鹿だと思つてたのか」

「ああ」

陳統の答えは素直すぎた。晁蓋が、不貞腐れたように横を向いた。

「わたしは……」

曹瑛が口を開いた。皆一斉に黙つて、曹瑛の言葉に耳を傾けた。

「わたしは、普通に生きたかつたの。嫁いで、子を産んで、育て上げて年老いていく。そんな普通の生き方がしたかつたの。でも、そんな

ことはまやかしだった。普通に生きる。今の世は、それを許してくれるほどあまくはない。それが、身に滲みて分かったの。役人や大商人のように、贅沢三昧の暮らしを貪る。それだって普通の生き方じゃない。普通の生き方って何なのだろう。それが分からなくなってきたの。自分が働いて得たもので、必要な物を**購**い暮らしていく。それが普通の生き方だと思っていたの。でもこの国では、額に汗して得たもの、ほんの僅かしかその人のものには残らない。そのほとんどが、朝廷を始め、その周りに蠢いている役人や軍人、大商人や大寺の僧侶、そんな一部の人間に独占されているわ。こんな富を富と言えるのかしら。本当の富とは、民一人一人が、今日の食べ物に困らず、明日はきつと今日よりもいい、そう思えることを言うのじゃないかって、わたしには思えるの。そして、そのために何かをする。それが現実になるように努力する。それこそが大切なんでって、今のわたしには思えるの。それを阻む者達との戦い。それを厭ってはいけない。それが、今のわたしの想いな」

曹瑛は一気にそう話すと、照れたような微笑を見せた。部屋の中の誰もが、その輝くような美しさに打たれた。

「曹瑛……」

雪華と黄玉が、ほとんど同時に曹瑛の名を呼んだ。

「雪華姉さん、わたしはそうした仕組みを作った、宋という国と戦おうとしているの。もう、雪華姉さんの仇だとか、そんなものではないの」

「曹瑛、それでいいのか。おまえは……」

雪華は言葉を詰まらせた。たおやかな容貌に似ず、一度心を決めたらけっして退かない。そんなところのある娘なのは、誰よりも雪華が知っていた。

「俺も曹瑛に賛成だ」

ぼそりと晁蓋が言った。

「よくぞ言った」

それまで口を閉ざしていた九天玄女が言った。

「見事な心意気だ。宋雪華、おまえの仲間はこちらまでの決心をしている。後はおまえの心次第だ。おまえの受けた苦しみは、おまえ一人のものではない。何千、何万という人間が、おまえのような苦しみを受けているのだ。おまえはそれを、見ない振りが出来るのか」

雪華は身体を起こそうとしたが、公孫勝に肩を抑えられた。

「玄女様、わたしには分かりません。それに、わたし達に国と戦うような力はありません」

「姉様」

黄玉だった。

「どんな大きな行いも、始めは一人。これだけの者がいれば、上々の出だしと言わねばなるまい。のう、地周の星よ」

話を振られた陳達が、目を丸くして李達の方を見た。

「地周の星って、そりゃ何のことですか」

「気にせんでいい。玄女様の、そう、いわば道楽だ」

李達も自信なげに言った。

「宋雪華、天魁の星よ、いずれ分かる時が来る。それまで、この私がおまえ達の力となるう。九天玄女がいかなる神かは知っているな」

「黄帝※が蚩尤※との戦で苦戦していた時に、靈符を携え陣形を教え、勝利に導いた女神。黄帝の師である聖母元君の弟子でもある」

石勇がすらすらと答えた。

※黄帝 中国古代の伝説上の皇帝。漢人の祖と言われる。

※蚩尤 黄帝と覇権を争った獣神。

「ほう。地醜の星よ、よく知っていたな」

九天玄女が嬉しそうに言った。

「かあちゃんが教えてくれた。貧しく辛い生活だったから、かあちゃんはその神様に縋っていたんだ。俺の緯名も、かあちゃんが付けてくれた。石將軍のように強くなれって」

「そうか、石將軍も道教の神だったな」

石勇の顔が綻んだ。

「そうか、そんな意味だったのか。俺はてっきり、將軍になるんだっ

ていう自慢かと思つてたよ。ごめんな、石勇」

陳統が、本当に申しわけなさそうに言った。

「いいんだ、陳統。言わなかつた俺も悪い」

石勇が照れるのを、雪華が優しく見詰めていた。

「雪華姉ちゃん、俺も綽名をつけることにしたよ」

陳統が言った。

「綽名もいいが、おまえ達は名を代えた方がよい。太原府のみならず、国からも追っ手がかかるとみななければならん」

九天玄女が言った。

「そのとおりですね」

雪華が肯いた。

「李達、おまえはどうします」

雪華の問いに、李達は即座に答えた。

「儂はこのままでいい。こんなことがなくても、儂は既に懸賞首だ。それに、名を替えたところで、一目見れば銅堤山の黒旋風だとばれる。名を代えても無駄なだけだ」

雪華は、笑いながらそうかもしれないと思つた。

「曹瑛、あなたは一番顔を知られているわ。特に太原府には」

雪華の言葉に、曹瑛も肯いた。

「役人にはあまり知られていないと思えますけど、城郭なかの人達とは付き合ひが多かつたと思います」

「名を代えなければならぬわね。いい名はある」

「もう決めています。蔣敬にします」

「蔣敬……」

「魯權の屋敷で亡くなつた、蔣唐小父さんの息子。幼い頃に亡くしたと言っていました。小父さんは、わたしを助けるために亡くなつた。

その小父さんを忘れないためにも、わたしは蔣敬を名乗ります。綽名も小父さんがつけてくれた神算子にします」

「神算子とは、曹瑛にはぴつたりね。名も、男みtain名の方がいいかもしれないわね」

「俺も決めてるんだ」

陳統が大声を上げた。

「何というの」

「綽名は鉄扇てつせん子し、名は宋清そうせい。雪華姉ちゃん、弟の名を貰っていいかな」

雪華は少し考えたようだが、微笑みながら陳統に答えた。

「いいわ。生きてたら、ちょうど陳統の齡ね。本当の弟だと思えるわ」
「やった」

陳統が、飛び跳ねんばかりに喜んだ。

「聞起、あなたはどうする」

聞起は戸惑った表情を見せた。

「綽名は、黄玉がつけたくれた神行しんぎょう太保たぽでいい。名が思い浮かばないんだ」

黄玉が嬉しそうな顔をしていた。

「そうね。わたしがつけていいかしら」

雪華の提案に、聞起は嬉しそうに肯いた。

「弟の名は陳統にあげたから、そうね、宋家村で馬の扱いが上手だった、戴たい宋そう小父せうふさんの名を貰ったらいいかもしれないわ」

「戴宋……うん、いいかもしれない。あの小父さんはいいい人だったから」

聞起は納得したようだった。

「雪華姉ちゃん、俺はそのままでもいい」

石勇だった。

「そうねえ……。石勇は顔も名も、ほとんど知られてないものね。どう、李達の考えは」

「儂もそう思う。宋家村の中にも、石勇を知らん者がおる。魯權の屋敷でも、顔を見られた者はほとんど生きておらん」

不気味なことを、李達は平然と言った。

「いいわ。石勇はそのままでもいいとしましょう」

雪華は、首を回して黄玉を見た。

「黄玉、あなたは名を替えなければ駄目ね」

「どうしてです」

黄玉は、名を替えたくはないようだった。

「あなたは目立ち過ぎるの。宋家村の女剣士、そう言われているわ」「わたしは目立たないようにしていたつもりですが」

聞起と曹瑛がふきだした。笑い転げているようだった。

「聞起、曹瑛、何が可笑しい」

黄玉が怒ったように言った。

「黄玉、怒っちゃ駄目。あなたは、そういうことには鈍いものだから」雪華に言われると、黄玉は黙った。

「名は、柴小母さんから柴を貰って、そうね、あなたは進むことしかないから進、柴進はどう。なんとなくいい感じよ」

「柴進ですか……。母の姓を名乗るのに異存はありません。それで結構です」

「あとは綽名だけど、何かいい考えはある」

雪華が皆を見回した。

「俺、考えたんだ。黄玉が俺に、いい綽名をつけてくれたから、俺も黄玉に綽名をと」

「鉄面女だろう」

不貞腐れたように、黄玉が言った。

「違う、あれは本気でつけたんじゃない。小旋風、そう考えたんだ」

「小旋風……」

黄玉が呟いた。

「いいわね、聞起。李達の黒旋風に似ていて、なんとなく黄玉に似合
いそうだわ」

雪華が賛成した。

「儂には似ても似つかぬがな。黄玉は」

李達が、少し恥じたように言った。

「気に入りました。聞起、感謝します」

「それじゃあ、鉄面女というのは」

「忘れます」

聞起はほっとした表情を見せた。

「最後はわたしね」

雪華が独り言のように言った。

「名は、父の名を貰うわ。宋江、そう決めたの。黄玉も曹瑛もそうだけれど、男の名にした方が、これからは都合がいいわ。綽名は、まだ決まってるけど」

「雪華姉ちゃん、綽名ならもうついてるんだよ」

陳統が言った。

「えっ。わたしは知らないわよ」

雪華が怪訝そうに言った。

「村の皆が二歳前から言ってるんだ。及時雨って」

「及時雨……」

「降ってほしい時に降る雨。恵みの雨。嬢さんにぴったりだな」

そう言ったのは李達だった。

「及時雨宋江。いい名前だ」

九天玄女が言った。

「そうなの。わたしは知らなかったわ」

「雪華姉ちゃんらしいや。自分のことになるよ、ほとんど気にかけてないんだから」

言ったのは、聞起だった。

「姉様、いい綽名だと思います」

黄玉も賛成した。

雪華も笑顔で肯いた。

「雪華姉ちゃん、この名は身内で使うわけじゃないよね」

陳統が心配そうに訊いた。

「もちろんよ。あくまで外に対しての名よ。他の村や県で、本当の名をつかうのは危険だから」

「よかった。全部覚えられるか心配だったんだ」

陳統の言葉に、石勇でさえ笑いだしてしまった。

「いい、わたし達身内以外の人の前では、今決めた名をつかうの。これからは、言葉や行動に今まで以上の注意が必要になるわ。それと、衣も換えた方がいい。憶えられているかもしれないから」

雪華の言葉に、全員が肯いた。

「それにしても、交易はどうしようかしら。このまま捨ててしまうと
いうわけにもいかないし」

雪華が気掛かりそうに言った。実際雪華にとって、今最も心配なのがそれだった。遼や西夏の商人に迷惑をかけたくない。雪華はそう思っていた。これは、あくまで自分の失敗。他の取引相手には、何の責任もない。数は多くなくとも、自分達との交易を支えている民もいた。

「それは考えなくてはならんことですな。だが、まずはここを切り抜けることが先決。残した仕事のことは、それから考えても遅くはない」

李達が言った。

「大丈夫、大事なものはわたしが持って来ています。落ち着いたら、誰か顔の知られていない者を遣って、交易は続けられると思います」

曹瑛が雪華に言った。

「分かったわ。そちらの方は曹瑛に任せます。後はここの防御ね」

「それについては、もう暫くはもつだろう」

公孫勝が答えた。

「ただし、全軍挙げての総攻撃でなければだが。もし禁軍が、犠牲を厭わず攻撃してくれば、落ちる可能性が高い」

「それも付け加えた。」

「じゃあ、あんまり追い詰めすぎちゃ駄目ってことだね」

聞起が言った。

「そのとおりで。幸い、使った罫は一つだけだ。残りの罫で、時間を稼ぐこと。それを第一に考えてほしい」

「あまり殺しすぎてはいかんということだな」

李達も同じ考えだった。禁軍を殲滅することなど、どだい無理な話だった。逃げ延びること。それこそが目的であり勝利であった。難し

い。だが、今日の戦いを振り返ると、けっして不可能ではない。そう、李逵には思えてきた。

「一つだけ言っておきます」

雪華が、横になったままで身を正した。

「李逵。もしもまだわたしを嬢さんと呼んでくれるなら、これだけは守ってください」

李逵は、驚いた様子で雪華の言葉を聞いていた。

「わたしのために、命を捨てることは許しません。黄玉、曹瑛、聞起、他の者も同じです。わたしを守るなどと思っではいけません。自分のために、いえ、自分達のためだけを考えなさい。陳達様も、公孫勝様も、ここにいる全員、死んでほしくはありません。一人一人、出来る限り生き延びることを考えてください。それがわたしの命令、いや、お願いです」

雪華はそう言うと、牀しよから半身を起こし、皆に深々と頭を下げた。

「よしてくれよ、雪華姉ちゃん」

聞起が、慌てて雪華の身体を横たえた。

「皆、お願い……」

雪華の声は、祈りのように聞こえた。

九天玄女が、雪華の目の前に立った。

「天魁の星よ。心安く養生することこそおまえの勤めと心得よ。天間の星も天殺の星もいる。この者達に任すのだ」

「ですが……あまりに人が……」

「それが運命運命なのだ。この国と、それを糺たそうとする者達との」

曹瑛の掌が、雪華の手を包んだ。

雪華の手から、暖かい安らぎの波が身体中に広がった。

ああ、この温もりだ。雪華は思った。曹瑛のこの掌に、自分はどれだけ助けられているだろう。曹瑛、そして皆、死んでは駄目。生き延びるの。わたしも努力するから。皆もきつと生き延びようね。そして、いつかわたし達の思い出の場所、あの輝水すいの庭に帰ろうね。雪華はそう祈るしかなかった。

・
・
・

平真は、最後の兵が広場から引き返すのを見ていた。信じられないほどの大敗だった。最前列の騎兵隊は全滅。歩兵本隊の五百も壊滅的な打撃を受けていた。敵に、損害をほとんど与えられずにだった。陽が山陰に落ちかけていた。低いとはいえ、山の日没は早い。今夜は長く感じられそうだ。平真は、ぼんやりとそう思った。

「都虞候様、経略使様がお呼びです」

杜愔の伝令兵が平真に伝えた。

「分かった。すぐ行く」

平真は兜を取ると、その足で杜愔の幕舎に向かった。歩兵の一部が、連れ帰った仲間の遺骸を埋める作業に追われていた。味なことをする。平真はそう思った。遺骸を運ばせることによって、処理の手間を省き、同時に復讐心の軽減を図っている。なかなか世慣れた者が敵の中にいる。油断は出来ない。そういう思いも湧いてきた。

「平真か」

幕舎の前に立つと、すぐに杜愔の声が出た。

「はい」

奥からさらに声が出た。

「入れ」

平真は、厚い布をかき分けて幕舎の中に入った。

中は簡素なものだった。小振りの牀が一つと、それよりは大きめな卓が一つ。それ以外は、小物を入れた荷駄が二つあるだけだった。経略使ともなれば、大仰な飾りで幕舎を物々しくすることが多いと聞いていたが、杜愔にはそういうところは見られなかった。虚飾を廃し、質実剛健を旨とする、杜愔らしい幕舎だった。

「平真、今日の戦の分析を聞きたい」

杜愔の声は穏やかだったが、その奥に怒りが隠れているのを平真は

感じた。

「まず、完膚なきまでの敗戦。そう言わざるをえません」

「ほう、手厳しいの」

「それを認めない限り、勝利はおぼつかないものと考えます」

「うむ」

杜愔は、頷いたまま口を閉ざした。

「最大の敗因は、敵の挑発に乗ったこと。次は、騎兵と歩兵の連携がとれていなかったこと。この二つだと考えます」

「兵が死んだのは、大きな落とし穴に嵌ったことではないのか」

「歩兵が崩れなければ、騎兵の損害はあそこまで大きくはなりませんでした。むしろ、騎兵の損害が十名程度なら、罨を暴くのに必要だったと言えなくもありません」

「では、第一の責任は」

「戦死されましたが、鳳都監かと。第二は、歩兵本隊の指揮をしていた張都監。畏れながらそう推察されます」

禁軍歩兵本隊を率いていたのは、都監の中で最も古株の張峻だった。武勇に秀でているわけでもなく、知略に富んでいるわけでもない都監だったが、手堅い用兵でそれなりの信用を勝ち得ていた都監だった。

「張峻とは、何度も共に戦をしておる。果敢とは言えんが、これまで大きな落ち度はなかった。儂にとつては、蒙重などよりよほど信頼出来る。罪を問うことはしたくない」

杜愔の言葉は穏やかだったが、決定であるということは、長年付き従っていた平真には分かった。

「では、騎兵隊との連携をもっと密に、とだけは注意が必要と思いません」

平真は折れた。

「分かった。伝えておこう」

杜愔は背いた。

「それにしても、賊の総数は三百余りで間違いはないのだな」

杜愔が確かめた。

「はい。その後人が増えた形跡はありません」

「たかだか三百余りにか……」

「十倍以上の兵とはいえ、片側は谷、片側は灌木や高木が生い茂っています。攻めることの出来る道は狭く、大軍であることが活かしきれません。この際、兵数の優位は、一度頭の中から消し去る必要があるかと思えます」

「そうかもしれんな」

「木戸の前の広場が、唯一の攻撃場所ですが、騎兵なら五十、歩兵なら七十が並べる限界と思えます。これがせいぜい五段から六段。一度につきこめる兵は、三百から四百といったところですよ。ですから、奴等とほぼ同じなのです」

「谷側からの攻撃は出来んのか」

「谷自体は、それほど急峻なものではありませんが、谷までの半里程の間は、やはり灌木や下生えが鬱蒼としており、罨も多数仕掛けられていると思われます」

「ふうむ。その罨を潰すのが先だな」

「豚か牛でも集めますか」

平真の言葉に、杜愔はすぐに答えなかった。

「どのくらいの時がかかる」

杜愔が呟くように言った。

「道々農家の柵の中を見てきましたが、あれだけの騒ぎでしたから、牛、豚、羊どれも移動させているようでした。犬も見当たりませんでした」

「今から捜しても、時がかかるということだな」

「ここまで連れて来るには、かなりの時がかかりましょう。むしろ、太原府の糧食と一緒に連れて来た方が早いかと」

「黄文柄に笑われたくはない」

杜愔が言った。

「そうですね。なら、いよいよよとなったら兵を使います」

平真は、仕方なく言った。これが、杜愔の欠点だった。誇りが高すぎる。だから、思い切った奇策も採らない。そんなところは、都監の張峻と似ていた。若い頃は、思い切りのいい果敢な攻撃で遼軍に名を知られていたという。老いがこうさせているのだろうか。平真は、そんな想いに襲われた。だが、それでも杜愔は尊敬に足る上司だった。策は限られてくるが、その不自由さの中で、自分は精一杯知恵を搾り出せばいい。平真は、そう心を決めた。

「死んだ兵の遺骸を持ち帰らせています」

「それで、少しでも兵達の反感を薄めようということか」

「それだけではありません。死体の処理をする手間を省くことと、もう一つの意味があると思われれます」

「もう一つとは。」

「必ずしも殺しはしない。そう示唆しているようにも思えます」

「そうか……。それは、こちら側の兵にとっては士気の低下につながりかねんな」

「そうです。捕まっても、毘にかかっても殺されないと思うようになったら、どこかで、相手に対して全力でかからなくなるような事態が起きかねません」

「それは、あり得るな」

杜愔が、小さく溜息をついた。あまり見たことのない姿だった。老いたのか。平真の胸が痛んだ。

「なかなかの策士だな」

「そう思います」

「逃げておるのは、宋家村の保正の娘だったな」

「はい。宋雪華、十八です」

「仲間で注意すべき者は」

「まず第一に、黒旋風。大穴に落ちた兵の大部分が、この者に討ち取られております」

「他には」

「女剣士がおります。黄玉という名で十七ということ。なぜかこ

のたびの戦には現れておりません。太原府にいた曹瑛という娘、これも十七ですが、短弓の名手だそうです。実際かなりの騎兵が、この娘に射倒されております。後、聞起という遼帰りの者がおります。騎乗に才を見せ、戦の節目節目に効果的な打撃を加えているようです。鳳都監の都虞侯は、この聞起という者に倒されました。同じく、十七と
いうことです。兵達の話では、一つ下に陳統という者がいるそうです。この度の戦では、歩兵本隊の切り崩しをしたようです。もう二人、太原府を抜ける時にいたようですが、詳しいことは分かりません」

「鳳潤を殺したのは」

「陳達という、黒旋風の手下だった者です。斥候兵の話では、どうやら東汾山から三百の山賊を率いて来たということですよ」

「その三百が中核、いや、その三百しかおらんということだな」

「この亀伏山に籠っていたもともとの山賊は、十人程度しか残っていないとの調べはついています」

「他には」

「これ以上は分かっておりません。この情報も、宋家党に詳しい兵達から聞き出したものです」

「宋家党な……。平真、おまえはどう思う」

「どう思うとは」

「この度の戦だ。ここまでになれば、戦と呼ぶしかあるまい」

平真は、すぐには答えなかった。

「禁軍都虞侯としてでしょうか。一人の民としてでしょうか」

「どちらでもよい」

「都虞侯としてなら、早急に砦を陥落させ、宋家党の一味を捕縛、出来なければ殺します」

「民としてなら」

「答えを控えさせていただきます」

平真の緊張した顔を見て、杜愔が初めて笑顔を見せた。

「おまえの答えは、聞かなくとも分かる。何故なら、儂も同じ思いだからだ」

平真が、面を上げて杜愔の目を見た。

「のう、平真。この国はどこかおかしいのではないかな」

杜愔の言葉に遊びは見られなかった。

「経略使様、そのようなこと、知府に知られでもしたら」

平真は、本当に心配そうに言った。

「おまえのような優秀な者が、いつまでたっても昇進できん。何度儂が推挙しても、都監に昇るのは、開封府高官の息がかかった者ばかりだ。それも太原府なら、黄文柄への賄賂でその後の昇進が決まるようなものだ。この国では、高官への賄賂と追従で昇進は思いのままだ。逆に、どんなに才があっても、それだけでは何の評価にもならないことだ」

「私には才がありません。だから、これ以上の昇進など考えてもおりません」

平真の心に、涙が一筋流れ落ちた。父のように、杜愔を思ってきた。だから杜愔が引退する時は、自分が軍を去る時だと思っていた。優しいとも言えず、どちらかというどぶつきらぼうな將軍だったが、平真にとっては、公平で正直な上司だった。農民の出自を、他の將軍のように笑うこともなかった。その杜愔が、何度も開封府に昇進の申請を出してくれていた。將軍として都監の地位に就くよりも、その杜愔の気持ちの方がよほど嬉しかった。

「これが、儂の最後の仕事になるような気がしておる」

「どうしても勝たねばなりません」

平真は真剣だった。

「本当に勝たねばならんのだろうか」

杜愔の言葉に、平真は驚いた。

「將軍、何を言われます。勝って、退く道に花を添える。あたりまえのことではありませんか」

「何に勝つというのだ」

杜愔の問いに、平真は言葉を見つけられなかった。

「おまえも、宋家村の娘に罪があるなどと思っておるわけではあるま

い。あの娘に罪などあろうはずがない。だから馮湧は、自分の命と引き換えに、あの者達を逃がしたのだ」

杜愔の言葉の一つ一つが、平真の心の奥に染み込んできた。

「儂はな、太原府禁軍経略使などという肩書きがなかったなら、おそろく魯權と黄文柄を討っておっただろう」

「そのようなこと……」

自分に言っただうするのだ。平真は心の中で叫んだ。

「のう、平真。本当の敵はどちらであろうの」

杜愔の問いに、平真はただ身を強張らせるだけだった。